

文学博士佐々木丞平氏及び佐々木正

子氏の『円山應舉研究』（共同研究）

に対する授賞審査要旨

写生絵画の至りついた姿には様々な俗説・風説を立てられた円山
 應舉であるが、明治二十一年一〇月、岡倉天心が「國華」第一号に
 『円山應舉』（享保一八〇寛政七（一七三三—一七九五）を寄稿、狩
 野派の弊風を一洗した画家」として称揚した論文によつて、近年の
 應舉研究は始まった。理論家でもあつた天心は應舉の精神を回想す
 るように警告を忘れなかつたが、ここに應舉は近世絵画研究の最も
 重要な画家として定位された。その後、應舉画及び人物に関するモ
 ノグラフは、佐々木丞平氏のそれも含めて、汗牛充棟もただならぬ
 様であった。しかし明治時代、他に先鞭をつけて應舉の略伝、作品
 を総合的に紹介した金子静枝の小著『円山應舉家譜』以外には、体
 系的多面的に應舉にアプローチしたものはなかつた。

本研究は「研究篇」「図録篇」の二部よりなり、さらに「研究篇」
 は、I. 生涯および作画活動の背景的考察、II. 資料解析研究、III.
 構成・描法解析研究、IV. 落款印章照合分析研究、V. 絵画思想解
 析研究、の五篇及び円山應舉関係資料より構成されている。まさに

應舉研究の究極的論文とでも言うべきものである。

まず第一に特記すべきことは、美術史家と日本画の実制作者との
 共同研究という点である。残された作品の分析や古文獻を読み解く
 ことによつて、いわば外側から画家やその作品に迫ろうとする美術
 史家の立場に、作者の制作時における絵画思想や思考の展開を実感
 を持つて把握することのできる画家の内側からの視点を合わせるこ
 とで、より具体的で厚みを持った立体的な研究を可能にしている。

次に注目すべきことは、應舉研究と銘打ちながらも美術史学の本
 質を見据えつつ広い視野に立つて日本文化全体へ考察を拡げている
 点である。「研究篇」の「序にかえて」の章で自ら述べているよう
 に、そもそも「美の創造」は「人類を人類たらしめる精神文化活動」
 であり、その「歴史を解明することこそ、人間が人類の歴史を知り
 得る最も強力な方法」であるとした上で、「視覚表現としての美の
 形態の歴史を研究する」美術史が、「文化史研究の重要な基盤とな
 り得る」と主張する。一見個人的に見える表現形式の変化・成立に、
 実はその国、その時代の社会的・文化的状況が深く関わっているか
 らである。そしてそのような視点から、「その一つのサンプルとし
 て江戸時代にわが国で活躍し、従来の伝統描法から近代絵画形式へ
 の展開の原点となつた円山應舉（一七三三—一七九五）を取り上げ、彼
 の作画理念を通し、江戸という時代の思想、そして江戸から明治へ

の近代化のうねり、さらにはわが国の文化形成の特性という点にまで広げ、考慮を試みる」と本研究を位置づけている。

また「序にかえて」では、絵画作品成立の構造を図解し、提示してみせることによって、作品に迫るためには何が必要なのかを明らかにし、美術史学の独自の方法論を打ちだしている。これに続く本論はその具体化である。

本論Ⅰは応挙が生まれた時代とその時代の画壇を概観することから始めて、応挙の交友関係・文化的環境など、画家応挙を作りだしていた様々な要因を検討する。貧農の二男として生まれたため、幼くして玩具書画骨董を商う尾張屋勘兵衛に丁稚奉公するが、この奉公が応挙をして当時流行した遠眼鏡に触れさせ、浮絵、眼鏡絵の創始へとつながったこと、狩野派が主として粉本模写によって將軍家、大名を背後にかかえその勢力をのばしたのとは対蹠的に、公家から皇室までその愛顧を蒙り、他方、京の町衆の支持を得て、たとえば現存する三井文庫の国宝「雪松図」六曲一双が三井家の家督相続の慶事を祝って制作されたものであるということ、また、応挙の写生画が当時の博物学、本草学、相学（人相、地相、家相などを観る学問）の発展と揆を一にすることは、すでに諸家の指摘するところであるが、漸く盛んになりつつあった医学や解剖学の発展も応挙の人体写生をより精緻にしたと考えられることなどが指摘される。

Ⅱは主に「研究篇」の最後に付録的に挿入された円山応挙関係資料『萬誌』『大乘寺文書』『植松家文書』の解析研究である。これらは応挙の日常生活、作画とその方法を具体的に示すものとして重要である。特に円満院門主祐常の日記風雑記帳『萬誌』は佐々木丞平氏が京都国立博物館に見出したもので、第一級資料といえる。Ⅱの大部分をその困難な解説に費やしているが、応挙の画説を紹介するとともに、円満院門主と応挙の関係、応挙の新たなクライアントの発掘にも祐常の果たした役割が大きかったであろうことを暗示している。また『大乘寺文書』は応挙寺と呼ばれるほど応挙の襖絵があることで有名な兵庫県城崎郡の大乘寺に伝わる卷子一卷に関し、近年襖の下張りから発見されたものも含めて検討されている。画料受取、応挙の晩年と弟子たちの様子を伝える応挙の手紙、円山派という流派概念を再考させる資料等であり、就中、応挙の襖絵制作に対する細かな神経の使い方を示すものは彼の性格と絵画の理解に多大の影響を与える。『植松家文書』は応挙と応挙の子応端と、応挙の弟子植松応令とその父蘭溪との間に交わされた手紙であり、中でも円山派における粉本の用い方に注目している。その他『写生雜録帳』に見られる応挙の自然主義のあり方、天明の大火（天明八年 一七八八）による空白期間を挟んで永く応挙の大幅面制作のアトリエであるとともに、中国伝来古画の閲覧の拠点でもあった京四条の大雲

院の存在が指摘されている。

Ⅲにおいては応挙の特色ある人物図の描法、骨格を描き、のち着衣をつけるという、粉本模写とは正反対の描写技法をとっていることが理解される。輸入された解剖図、相書等の影響であろうか。また山水図については近大遠小的中国風構図法を三遠法型、水平面・垂直面接合型等の七種に分類して、最後に眼鏡絵の手法、効果の解説に及ぶ。

Ⅳでは新構想の下でコンピュータを使用して照合を行ったが、殊に印章の「経年変化」という概念を持ち出したことは、印章照合という問題に従来見ることのなかった独自の進化を見せたといえる。その結果として引出された今までと異なつた結論についても精密に実証している。

Ⅴにおいては、応挙の写実主義（臨場感表現、リアリズム）、写生主義（自然主義的表現、ナチュラルリズム）について正面から立ち向かつている。日本美術史では従来、作品分析は行われても、美術史の主要な概念であるリアリズム、ナチュラルリズム等については史家が充分理解せず、それを使用する勇氣も無いまま、作品の具体的な記述のみに終わった嫌いがある。本論文ほど独自に概念規定をし、実作品に即して真摯に論じたものは初めてと言つてよい。

IからⅤまでの各篇は全て精緻慎重に行われ、病身を押しして脚に

よつて実地を検分するなど徹底した実証主義の立場が貫かれてい
る。その真実追究の熱意には驚かされる。

図録篇には七三七点の作品が掲出されるが、図版の中には、『売立目録』中より取つたものもあり、今は所在不明のものも多いが、現在見得る作品は全て視野に入れてい
る。作品調査に費やされたエネルギーは大変なものであつた。

最後に、研究篇中の挿絵が佐々木正子氏の手になるものであることを付け加えたい。

日本絵画史研究において、西洋画、中国画の理解を助けとして、徳川中後期一八世紀における円山応挙の人物と画業、そしてその時代を徹底的に究明した両佐々木氏の業績の高さは、日本学士院賞に値するものとして認められる。